法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-22

山名弘史先生を送る

法政大学, 史学会

(出版者 / Publisher) 法政大学史学会 (雑誌名 / Journal or Publication Title) 法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

79

(開始ページ / Start Page)

198

(終了ページ / End Page)

209

(発行年 / Year)

2013-03-24

かではありますが先生への感謝の意を表したいと思います。

の研究の一層の進展を願ってやみません。

ここに先生の御経歴・御業績、

お人柄の一端を紹介し、

ささや

山名弘史先生を送る

山名弘史先生は東京大学文学部東洋史学科助手を経て、一九八三 山名弘史教授の履歴と業績

担当してこられました。とくに栃木利夫先生が第一教養部から史 年に助教授、一九九七年に教授に昇任されました。二〇一三年三 年に法政大学文学部史学科に専任講師として着任され、一九八五 いで着任されてから三十年間、法政大学文学部史学科の東洋史を 政史学会の発展に尽力されてこられました。 文学部史学科主任、法政史学会会長などを歴任され、史学科と法 月三一日をもって定年退任されることとなりましたが、その間、 ご専門は主に清朝末期の社会経済史で、河原正博先生の後を継

> 九四二年 九月一

略年譜

九四九年 四月 日 府中町立府中第一小学校入学。 東京都に誕生。

九五五年 三月 府中町立府中第一小学校卒業

九五八年 三月 明星中学校卒業

九七〇年 九六一年 三月 明星高等学校卒業。

五月 東京大学文学部東洋史学科卒業。 (大学紛争に

よる変則

三月 東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻 修士課程修了(文学修士)。

九七三年

を背負ってこられました。史学科で東洋史を学んだ学生で、先生 学科に転属された二〇〇三年までの二十年間は、お一人で東洋史

の御学恩を蒙らなかったものはありません。

御退任の後も引き続き我々にご指導頂けることと、先生ご自身

修士論文「清末浙江省龍游県の紳董の存在形

態について」

四月 財団法人東洋文庫研究部嘱託。(一九八一年三

九八〇年 三月

月まで)

東京大学大学院人文科学研究科東洋史学専攻 博士課程単位取得退学。

一九八

四月 横浜国立大学教育学部非常勤講師。(一九八四四月 横浜国立大学教育学部非常勤講師。(一九八四

九八一年 四月 財団法人東洋文庫奨励研究員

九八三年 四月 法政大学文学部専任講師。(史学科・東洋史)九八二年 四月 東京大学文学部助手。(東洋史学科)

九八五年 四月 法政大学文学部助教授。

二〇〇六年 四月~翌年三月 国内研修。 一九九七年 四月 法政大学文学部教授。

【出講大学】

東洋大学

上智大学

國學院大學

【学会活動】

法政大学史学会会員。 東洋史研究会会員。 歴史学会会員。

【主要著作目録】

(共著)(九七五年 『中国土地契約文書集(金―清)』(財団法人東洋文庫)

九七六年 「清末江蘇省の義倉―蘇州の豊備義倉の場合―」(『東

(『史学雑誌』八七―五)

「一九七七年の歴史学会―回顧と展望―(中国―近代)」

九七八年

九八〇年 「清末江南の義荘について」(『東洋学報』 六二―一・二)

山名弘史先生を送る

九九五年 「道光期江北の米市場―沛県の小事件をめぐって―」九九三年 「林則徐と銀問題」(『法政史学』四五)

二〇〇七年 「清末の蘇州商務総会について」(『法政史学』六八)二〇〇四年 「虧空について―動項補論―」(『法政史学』六一)二〇〇年 「動項について」(『法政史学』五三)

2012年度 法政大学史学会総会・大会 史 上 0 法政大学文学部教授 人 物 議事会の辞 2 総会の次第 総会・大会の次第 一三時 一三時四五分 一三時四五分 0 お 一年度事業報告 年度決算報告 **懇**講 研 総会 親 領 発 会 表 0 山名 き あ 弘史氏

山名弘史先生を送る言葉

山名弘史先生を送る

後藤 篤子

年には専任教員として史学科に着任することになった。つまり、 に足を踏み入れたのであった。それが縁で私はその後六年間、 山名先生とは四半世紀を越えるお付き合いということになる 任講師として法政で西洋史ゼミを担当させていただき、一九八九 れたことに伴う兼任講師として、 かいなかった西洋史担当教員の故倉持俊一先生が国内研究を取ら のことであった。奇しくも私はその年の四月、当時はまだ一人し が法政大学文学部史学科に専任としてご着任になった一九八三年 いられない。 Щ 名弘史先生が定年退職を迎えられる。月日の流れを感じずに 私が山名弘史先生と初めてお会いしたのは、 今は解体された第一校舎四階で西洋史研究室と はじめて法政大学のキャンパス 先生 兼

してくださった。と思うのだが、先生は常ににこやかに優しく接いまで、一切ではないかと思うのだが、先生は常ににこやかに優しく接いで、西洋史研究室では故倉持先生のお人柄もあり頻繁で教員と学生が酒を酌み交わしながら熱く語り合うという「古きびお会いする機会に恵まれた。当時はまだ、ゼミ終了後に研究室びお会いする機会に恵まれた。当時はまだ、ゼミ終了後に研究室

責任感やご家族への配慮であったろうと思っている。教授会などなお人柄であるかを、さらに深く知ることになった。先生は二○のだが、その間もその後も在外研究を取られただけであった。着任が新しい研究も二○○六年度に一度取られただけであった。着任が新しいのだが、その間もその後も在外研究を取られることはなく、国内のだが、その間もその後も在外研究を取られることはなく、国内のだが、その間もその後も在外研究を取られることはなく、国内のだが、その間もその後も在外研究を取られることはなく、国内のだが、先生がご自分の「都合」と仰っていたのは、学生への都合いたが、先生がご自分の「都合」と仰っている。教授会などのだが、先生がご自分の「都合」と仰っている。教授会などのだが、先生がご自分の「都合」と仰っている。教授会などのだが、先生がご自分の「都合」と仰っている。教授会などのだが、先生がご自分の「都合」と仰っている。教授会などのでいる。教授会などなお人柄であるかない。

Ш

東洋史研究室が隣り合っていたこともあり、

山名先生にはたびた

故倉持先生の山名先生評に得心すること、度々であった。憚なく口にされるお姿も、忘れられない。「史学科の良心」という、で「はいっ」と手を挙げられ、ご自分が感じた疑問やお考えを忌

山名先生は三〇年にも及ぶご在職期間を通じて、教育とご研究のかたわら、学科主任や教授会副主任など重要校務に携わられ、のかたわら、学科主任や教授会副主任など重要校務に携わられ、大試業務にもずっと貢献されてきた。法政史学会会長も長くお務めくださった。私の中の先生はずっと変わらぬお若さで、先生が持政大学を去られるとは信じ難い思いである。先生の優しい笑顔、法政大学を去られるとは信じ難い思いである。先生の優しい笑顔、法政大学を去られるとは信じ難い思いである。先生の優しい笑顔、お言とは淋しい限りであるが、都内にお住まいなのだし、まだまが、おいている。

ますますご研究を深められ、ご活躍くださいますよう。そして、お疲れ様でございました。これからもお身体にご留意の上、山名先生、長きにわたるお導き、本当にありがとうございました。

惜別の言葉

澤登 寛聡

ます。 しきに私が着任したからですが、今年で十七年ということになりい戴いたのは、平成八年(一九九六)四月からとなります。この任として法政大学に着任されました。私が先生と実際におつきあ任として法政大生は、前任の先生で私も教わった河原正博先生の後

> この十七年間、そのようなことがついぞなかったと言っても過言 かったのではないかと思われます。 に思います。多分、このような先生に魅せられた学生も少なくな あるごとに、こうした人としての在り方を教えていただいたよう い気持のあらわれなのであろうかと拝察しますが、 つけないように慎重に配慮し、ご自身の見解を述べるという優し ではないと思います。こうした先生の在り方はできるだけ人を傷 た物言いになってしまうことがあります。しかし、先生にあっては、 きました。人はいろいろ議論を交わして白熱してくると我を忘れ やかな口調ではっきりと仰る先生である事などが次第にわかって ばならないことは、 大変に物静かで穏やかな先生である事、にもかかわらず、言わね して、これが先生の最大の個性だと誰もが考えると思うのですが、 つきあい戴くようになると清朝社会の研究をなされている事、そ 知るという機会には恵まれませんでした。しかし、同じ学科でお 部史学科の中国史の先生であるという事以外、何か先生について それまで私は、先生を遠くから拝見することはあっても、 教授会や委員会でも、いつもと変わらない 先生にはこと 穏

拶をなされていたことが懐かしく想い出されます。
ました。法政大学史学会ではあの温和な語り口で会長としての挨時期ともかさなって体育会の部長会でも、ご一緒させていただき活躍されました。自転車部の部長の時は、私が重量挙部であった活躍されました。自転車部の部長や法政大学史学会の会長としてもまた先生は、自転車部の部長や法政大学史学会の会長としてもまた先生は、自転車部の部長や法政大学史学会の会長としてもまた。

務を代わって戴いたりと大変、お世話になりました。末筆ですが、最後になりましたが、一昨年は、わたくしの私的な事情から公

先生の研究分野については、

私は専門外の者として云々するこ

惜別の言葉に代えたいと思います。 心からお礼を申し述べ、先生の今後のますますのご活躍を祈って

山名弘史先生を送ることば

長井 純市

山名先生、長い間、研究・教育・学務等におきましてご尽力ないましたこと、お疲れ様でした。先生のおそばで共同作業を行されましたこと、お疲れ様でした。先生のおそばで共同作業を行されましたこと、お疲れ様でした。先生のおそばで共同作業を行されましたこと、お疲れ様でした。先生のおそばで共同作業を行されましたこと、お疲れ様でした。

先生に関する一番の思い出は、ここに記すことはいささかふさた生が緊急に職場から病院に行くこととなったときに、先生のおそ生が緊急に職場から病院に行くこととなったときに、先生のおそはについて私も同行したときのことです。私には初めての経験でしたので、大いに驚き慌てました。しかし、病院到着後、治療にしたので、大いに驚き慌てました。しかし、病院到着後、治療にしたので、大いに驚き慌でました。しかし、病院到着後、治療にしたので、大いに驚き慌でました。となったときに、先生のおきに関する一番の思い出は、ここに記すことはいささかふさと、そのときようやく気付きました次第です。

とは出来ませんが、着実な考証に先生の研究手法の特徴(そしてとは出来ませんが、着実な考証に先生の研究姿勢をそのまま表現のいて語られたことは、 、大生が歴史学を通じて人文科学の魅力に ・一二年一二月、文学部九○周年記念行事においてパネルディスカッを守り続けていらっしゃると思います。最後の年度となった二○一二年一二月、文学部九○周年記念行事においてパネルディスカットとないであるように拝見しています。即断を排してテキストとないて語られたことは、そうした先生の研究手法の特徴(そしてとは出来ませんが、着実な考証に先生の研究手法の特徴(そしてとは出来ませんが、着実な考証に先生の研究手法の特徴(そしてとは出来ませんが、着実な考証に先生の研究手法の特徴(そしてとは出来ませんが、着実な考証に先生の研究手法の特徴(そしてとは出来ませんが、着実な考証に先生の研究手法の特徴(そしてとは出来ませんが、着実な考証に先生の研究手法の特徴(そしてとは出来ませんが、着実な考証に先生の研究手法の特徴(そしてとは出来ませんが、着実な考証に先生の研究手法の特徴(そしてという)

先生のご指導の下、東洋史を学んだ多くの学生は、年齢を加えたり、それは、ひいては本学自体が先生のご在職に感謝し続けしょう。それは、ひいては本学自体が先生のご在職に感謝し、幸福のカテゴリーに属する、もっとはるかに大切なものとなることでのカテゴリーに属する、もっとはるかに大切なものとなることでしょう。それは、ひいては本学自体が先生のご在職に感謝し、幸福のよう。それは、ひいては本学自体が先生のご在職に感謝し、幸福のよう。それは、ひいては本学自体が先生のご在職に感謝し続けることでもあります。

今後も引き続き先生のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。するという姿は、私の模範とするところです。をじっくり観察し、考察(熟考)し、その上でご自身の言動を発をじっくり観察し、考察(熟考)し、その上でご自身の言動を発

願い申し上げます。 そして、今後も「法政大学人」を見守り、ご教導賜りますようおそして、今後も「法政大学人」を見守り、ご教導賜りますようお

山名弘史先生を送る

第七十九号

山名先生を送る

大で助手を務められてから法政大学に来られたということであっ 名の先生方の中でも山名先生は最古参であるとその時聞いた。 名先生がご退職 中で比較的新しい方に属する。 の時となった。 私の史学科への着任時 着任時におられた六 加納 期 格 東 は ではなかったかと思います。 私 が初 めて山名先生にお目にかかったのは

在の

教員

0

Ш

る

記 その関係の仕事では先生の中国近代史の深い学識で手助けいただ 世紀にかけては露清関係、 ることがあるかと思っている。 現代と強く関わりをもつ研究分野である。 ツな私は、 ないのであろう。 方向でもう少し仕事をする心算でいるが、また先生にお尋ねす 先生のご専門とされる中国近代史は、私の関心であるロシア近 国地名というのは、 国語表記一般についていえることであるが、 幾度となく助けていただいた。 今後のご厚誼とこのお願いをもって送る言葉としたい。 先生のそのビヘイヴィアに何事につけてもガサ 私にとっては難点なのである。 ソ中関係として一際関係が強かった。 是非今後も宜しくご教示ほどお願 殊に一九世紀から二〇 ロシア語表 今後こ

山名先生、 お疲れさま

中村

純

先生、 先生、 とうございました。 数にしては国内研究も一度くらいで在籍の間ほとんどあの仕事を おられるのを見て、 安定した方で、こちらが頭に血が上ったり、 いませんが。 うことになります。 いろいろ出入りがありましたが私が初めてあの仕事を始めたとき やはり数年前に退職された栃木先生でした。その後メンバーには 職された松田先生、 たばかりでなくサッサと別の世界へお引越しされてしまった倉持 業務で働くこととなりました。当時のメンバーはすでに退職され そしてその後二〇〇七年まで二十年以上にわたってほぼ毎年同じ 初めて山名先生と入試関係業務をご一緒させていただきました。 ふと見るといつも山名先生が穏かな微笑みを浮かべて淡々として れることがなかったように伺っています。 レギュラーのメンバーでは今や私だけが残されてしまったとい 第二教養部から社会学部に移られて昨年度退職され 同じく第二教養部から人間環境学部に移られて数年前 気骨の折れる仕事でしたが山名先生はとても情緒の 私と同じ第一教養部から文学部に移ったあと 気を取り直すことになるのです。 かくいう私も二〇〇八年以降その仕事をして その時、 第一 教養部新任教員として 長い間本当にありが 落ち込んだりした時 一九八五 長い勤続年 年の た相良 Ŧi. に退 月頃

0)

生が伝統ある東洋史学で薫陶を受けてこられたことと無関係では

沈着冷静に物事を処理されるの

は

先

に人となりに接してその紳士的で温厚なお人柄を知ることとなっ

何かあっても動ぜず、

その後授業など様々な校務をご一緒することもあり、

だんだん

経歴に重なる部分もあって何か親しみを感じたものであ

山名弘史先生を送る

史学科の共同研究室や多くの教員の研究室のあるボアソナード

小口 雅史

れる大学、であった。 学への赴任が決まった私にとっては、法政大学=山名先生のおら おられないような感想を持ってしまったのを覚えている。法政大 もお目に掛かったことはないはずである。それでもその印象は強 姿も何度も拝見した。もっともそれ以後は、私が最初の奉職先で 史研究との接点は多い。私が大学院博士課程(国史学専門課程) く、久しぶりに法政大学で再会できたときにも、 ある弘前大学から法政大学に転任してくるまでは、 その研究室には結構出入していたから、若かりしころの先生のお 学に転出されたので、接点があったのはわずか一年間だけではあっ に進学したその年、 日本古代史を勉強していると、 私と山名先生の出会いは、一九八二年にまで遡る。 東洋史には時代を問わず知人が何人もいたこともあって、 東洋文庫から戻ってこられた。先生は在職一年で法政大 山名先生は助手として東洋史学研究室の助手 比較という観点から中国古代中世 あまり変わって おそらく一度 私のように

う)、あまり着ないのであるが、 ごく一時期を除き、 ドマークである、明るいグレーの背広である。 .名先生といえば、誰でもすぐ思い浮かべるのは、そのトレー 薄い色の洋服は汚れが目立つので(実際すぐに汚してしま 清潔感あふれるこのお姿は一貫している。 山名先生は本当にきれい好きなの 真夏の本当に暑い 私

> 思うといささか寂しいし、文学部にとっても大きな損失である。 我々がそうした気風をしっかり継いでいかなければなるまい。 いところを述べておられた。あの勇姿がもう見られなくなるかと おかしいと思ったことは、「はい!」といって挙手され、忌憚のな 感ないし正義感は、教授会発言にもしばしばみられた。少しでも というA4大の紙が貼られたことは記憶に新しい。こうした清潔 鶴の一声で、「ここはみんなが使う場所です。奇麗に使いましょう_ タワー一五階の流し台の汚れをいつも気にしておられた。

康に十分留意され、お元気にご活躍ください。

先生、長い間、本学のためにご苦労様でした。これからもご健

山名弘史先生を送る

小倉 淳一

かしさとともに学生時代のノートをめくってみると、概説(一) 箱にしまい込んであるもので、 とした本格的な東洋史を初めて学んだ。 た私は月曜と金曜に配置された授業を受講し、 よび概説二)を山名弘史先生が担当されていた。学部二年生だっ 当時の受講ノートが手許にある。実家の押し入れに段ボー 九九六年度の東洋史概説の授業は、通年の二科目 滅多に開くことはないのだが、懐 中国の歴史を中心 (概説 ル お

Ш

外国史の勉強はあまりしてこなかっ

しようと大学に入った私は、

は宋代まで、(二) は元代以降の内容となっていた。日本史を専攻

れは誰もが経験したことではなかろうか。ご退職をひかえた今年

山名先生とご一緒していると、どこか和んだ気持ちになる。こ

答案を出すのがひどく恥ずかしく、 しようと心改めたものである。 代王朝を継起した順序で書き上げるよう指示された。 る学習のレベルを知りたい」とおっしゃり、 試験ではないと前置きされた上で、「皆さんの知識と東洋史に関す 名先生は概説の授業の始めに試験用紙をお配りになり、 中 国 一史の年表すら十分に頭に入っていなかった。 一年間しっかりと授業に集中 まずはそこに中国歴 そのときの これ は

もあるように思われた。 先生のお話はさまざまな方向に広がり、 理解することで精一杯であった。中国の歴史は長く、そして深い。 11 いることもあり、 思い出である。 とはいえ高校世界史のレベルにとどまっていた私には、 その対策に頭を痛めたことも、今となってはよ 前期・後期にそれぞれ試験が準備されて 学ぶべきことはいくらで 授業を

b

ń

0)

とを懐かしそうにお話ししてくださった。先生に教わった学生の 国 された年であったとのこと。 先生のお仕事の事情があって、 外なお答えをいただいた。 た学年の授業として印象に残っておられるのかもしれないのだが。 こか誇らしく思われた。 いつものようにほほえみを浮かべられながら、その年の授業のこ 人として、 その学生達も四十の半ばを過ぎ、あの頃の先生の年齢を超えた。 .通史を受講できた幸運な学年に属していたのであった。 最近になって先生に二年生時の授業のことをお伝えすると、 先生が当時のことをよく覚えておられたことが、 実際には、先生に散々ご面倒をおかけ その年は通常の年とは違って、 つまり、 先生が二つの概説をお一人で担当 私たちは山名先生による中 兼任の 先生は 意 سلح

> 添えいただけるようお願い申し上げる次第である。 後とも先生にはますますご健勝でご活躍いただき、 ない姿と優しいお言葉をいただけるような気がするのである。 おられないようである。先生にお目にかかるたびに、お変わりの しかし不思議なことに、 の立ち姿は、二十七年前の授業の当時から、 腕組みをしながらほほえんでおられ ほとんど変わって 私たちにお力 る先

生

山名弘史先生を送る

藤

勝

るにあたって山名先生には感謝の言葉しかない。 話しさせて頂いた。どれもよき思い出であり、 じくし、 ゼミの学生とともに中国の江南地方を旅し、 時には数時間に及ぶこともあった。とくに昨年の夏にはお互 の後も今日まで、しばしば二人でお話をさせて頂く機会があり、 もあって、東洋史という学問についても色々とお話し頂いた。そ 中国史を専門としており、 科のあり方について一つ一つ丁寧に教えて下さった。また、 経験のなかった私に職務の内容や沿革、法政大学や文学部 私が赴任した三年前、 毎月ある委員会でご一緒させて頂いた。山名先生は、 先生にはきっと迷惑だったに違いないが、 ちょうど山名先生が学科主任を務め 同じ大学・学部学科の出身ということ ホテルでは部屋も同 ご退職の日を迎え 夜遅くまでお 専任 てお W 0)

Ш

名弘史先生を送る

が、お話ししていると、 学に赴任したところも一緒である。だからかどうかは分からない 地もほとんど一緒で、 うに山名先生と私は専門や出身校が一緒である。さらに育った土 です」と言われることがしばしばあった。「隠れ」である必要はな ているが、そのお人柄に関しては到底、真似することが出来ない。 ように思う。ひそかに私自身は「山名先生と自分は似ている」と思っ いとは思うが、ついつい「隠れ」とつけてしまうの 度になって、学生だけでなく教職員からも「隠れ山名ファンなん 奥ゆかしいお人柄の表れなのではないかと思う。 .名先生の真似をすることは、 四十歳になって初めて専任職を持ち法政大 お互いの意見が一致することが多かった 私だけでなく、 おそらく誰にも 先に記したよ Ŕ 山名先生

後を継ぐ者として、 史学科の東洋史を背負ってこられた山名先生の姿を心にとどめ、 出 いう主張に同意してくれた人はこれまで一人もいないので、 発展させていくことを誓って、山名先生を送る言葉に代えたい。 そのご意志を引き継ぎ育んでいくことは不可能ではないと思う。 らくそちらが正しいのだと思う。 .来ないだろう。しかし、三十年の長きに亘って法政大学文学部 最後に一つだけ付言しておきたい。 山名先生が築き上げてこられたものをさらに 山名先生と私が似ていると おそ

山名弘史先生を送る言葉

塩沢 裕仁

代未聞

Щ .名先生とは先生が法政にご着任されてからのお付き合いであ

> いと思います。 を知ることのできる印象的な出来事を一つ選んで記すことにした きます。そこで山名先生の学者として、また人間としてその人柄 官にあたり何を書くかと考えれば考えるほど書くことが浮かんで か れこれ三〇年にもなります。したがいまして、 先生のご退

ŋ

が洛陽にお越しになったときのことです。先生が黄河をご覧にな ご自身の研究対象である中国にお出かけになることは数える程し トルほどですが両側に数キロの河川敷を持ちますから、 ところに滔滔と流れる河水があります。 大橋の側道をとほとほと歩きはじめました。三分の二ほど渡 足されております。「歩いて渡れないことはありませんが…」と前 の中央まで車で行き写真を撮って帰りますが、それでも十分に満 いた私でもこれだけは初めての経験です。洛陽を訪れた方々は橋 いて渡れないことはありませんが、洛陽で数々の遺跡を調査 ウービュウーと川風が吹き付けるなかを歩くことになります。 四キロを超えます。 でも比較的川幅の広いところに架けられているため、その長さは 吉利区との間に架かる黄河大橋に出掛けました。バスで大橋を渡 りたいということで、路線バスを乗り継ぎ、洛陽の北、 かありませんでした。その内、 山名先生は学生の教育、 「塩沢さん、歩いて渡れませんかねぇ」と。この橋は黄河の中 風が強いのでそのままバスで引き返すかと思いきや、いきな の行動に躊躇したものの、 歩いて渡れば優に一時間はかかりますし、 大学の業務などに奔走されていたため 私の中国滞在中ですが、 結局お情けのように設けられ 流れの幅自体は Щ 名先生 つみて いった して

ŋ

ŋ

おます。おその景色は雄大の極みです。飛ばされるほどの川風が吹き付けれます。はこれまで黄河を見ずに黄河のことを語ってきました」と。中ご自分の語ってきた学問の在り様を黄河に語りかけるように一言、ご自分の語ってきた学問の在り様を黄河に語りかけるように一言、る中、そこで先生ははたと立ち止まり、じっと川面を見つめながら、もその景色は雄大の極みです。飛ばされるほどの川風が吹き付けれます。

話り尽くせないことばかりなので、何方もご存じない山名先生の一面を記しました。山名先生の人柄の良さは誰もが認めるとこの一面を記しました。山名先生の人柄の良さは誰もが認めるとこの一面を記しました。山名先生はきっとニコニコしながら「そんな生の学問と向き合ってきた姿勢が凝縮されていると感じた次第で生の学問と向き合ってきた姿勢が凝縮されていると感じた次第でまり口を思い浮かべてみてください。その山名先生の機能というないで、何方もご存じない山名先生が法政東洋史の看板でありえたといえるでしょう。

山名先生を送る言葉

竹茂 敦

たり落ち着いた物腰も昔からで、初めてお目にかかってから二十た九○年代半ばにはすでに髪の毛は今のような白さでしたし、ゆっり実感がわいていませんでした。山名先生は、私が山名ゼミに入っ前から承知していましたが、正直言って、今年度に入ってもあま山名先生が二○一二年度で退職なさるということはずいぶん以

代はもとより、

国史のよもやま話を伺う機会にずいぶん恵まれ、ご専門の清朝時生になると山名先生の研究室に入り浸るようになり、先生から中

古代から現代までの中国に関する博学多識さに、

このようにけっしてまじめとは言えない学生だった私も、

に人柄が良いのだな」との印象を強く受けたのでした(と、思い出 にいった際のことです。にこやかな笑顔の山名先生から「よく眠 な時もにこやかな笑顔に違いないと思います)。 あれは皮肉だったのですよ」と言われたりして…? ただ、そん 風に書いてみましたが、実際に山名先生にお尋ねしたら、「いや、 先生の授業に出始めてまだ日の浅かった私は「この先生は、本当 微笑んで「それはよかった」との反応で、その笑顔が何とも柔和で、 たく他意はなかったのですが…)。しかし、山名先生はにっこりと (一応この場を借りて言い訳しますと、本当に反射的な返答で、まっ かげさまで」などと答えてしまったという、事件、がありました れましたか?」と尋ねられ、答えに窮した私は思わず「はい、お がしばしばでした。そんな概説の授業終了後に出席カードを渡し 私も先生の東洋史概説や特講では意識が 守唄」とささやかれていたのですが(現在も?)、御多分に洩れず、 間では、そのおだやかな口調ゆえに「授業での山名先生の声は子 もらった時期のことだと記憶しています。当時のわれわれ学生の に入ってしばらくたった、おとなしい私もそろそろ名前を覚えて 来事をつい最近のことのように覚えています。二年生で山名ゼミ 年近くが過ぎましたが、年をとられたという感じがしません。 山名先生の思い出としては、先生の人柄の良さを感じさせる出 、違う世界、に飛ぶこと

山名弘史先生を送る

史料を繰る楽しさを教えていただきました。また、私が国際政治 祈りつつ心より感謝を込めて。 思えます。 ない、中国へのおだやかな眼差しと愛情がとても山名先生らしく 「大学の先生とはこういうものなのだな」と感銘を受けるとともに、 しつけな元教え子でして…申し訳ありませんでした)、昔と変わら イントも取らずにいつもふらりと研究室に訪れるという何ともぶ の大学院に進んだ後は、年に何度か研究室にお邪魔すると(アポ ご退職にともなって、山名先生のおだやかな笑顔とご見識を拝

何とも残念です。長い間どうもお疲れ様でした。先生のご健康を することのできる機会がこれまで以上に少なくなってしまうのは